

ビルマ野戦兵器廠

地獄を見たビルマ戦線

兵庫県 木村 祐

兵庫県姫路市久保町という所で、大正十一年九月十六日、六人兄弟の次男として生まれ、家族は兄、弟、妹である。学校卒業後の昭和十三年四月、関西電力に勤務した。昭和十八年十月一日、召集を受け、十月五日、丹波篠山の部隊（原隊は東京だった）の強電に對する兵技兵として入隊した。

篠山の連隊で一カ月の基礎訓練を受け、ビルマ方面への出動の命令が出た。部隊を編成した。その内容は技術將校以下百名、うち初年兵は五十名で、昭和十八年十一月三日、衛門を出て大阪に到着。民家へ二日間、宿泊し、十一月五日夜出港。輸送船は「銀洋丸」という貨客船で九千トン級の船であった。私たちは船底で、隣室は馬のいななきや、馬小屋の臭気があった。瀬戸

内海、玄界灘を航行し、台湾高雄沖に半日ほど停泊、夕方馬公へ入港、そこで船団を組み一週間停泊した。

駆逐艦二隻の護衛を受け南下したが、そのうち後尾の船が潜水艦の魚雷を受け沈没した。私はその船が大きな水しぶきを上げて沈むのを確認している。我々の船は九千トン級の貨客船であり、船首と船尾には野砲を据え付け、船舶砲兵が乗っていたのである。我々の船のみは途中、船団から別れ、十一月二十七日、仏印のカムラン湾に入り、川を遡航しサイゴンに上陸した。

サイゴンに三日滞在、タイのバンコクへ移動したとたんに空襲である。汽車でカンボジアへ、プノンペンで一週間滞在后、カンチャプリンへアナグインまで汽車である。しかし、その後空襲のため線路が破壊され運行ができない。アナグインからは敵機が機銃掃射を浴びせながら旋回し、我々を発見しては攻撃してくる。そこで、昼間は休憩し、空襲を避けるため、夜半徒歩で行動である。公路は通れぬから山中を行く。初めは分からなかったが山の中のジャングルで草についている山蛭に悩まされた。日本で蛭といえば田圃にい

るが、山蛭は被服を通して入ってくるので痒くて痛いのに悩まされる。初めての体験だった。首筋は勿論、巻脚絆の中まで入ってくる。痒いので帯剣で殺したが血を吸っていた。

我々の部隊は兵器廠関係だった。その当時は一兵卒だったが最初のころは日誌を書いていた。その貴重な記録は終戦後、命令により焼却したが、今思えば残念な気がする。続いて、行動を記憶によって申し述べる。アナクイから汽車でモールメンまで、マルタバンの川を船で渡る。また、汽車に乗りラングーンに着いた。昭和十八年十二月三十一日、大晦日であるので今もよく覚えている。当時、ラングーンの駅舎は無傷であった。

そこで編成され部隊の一員となる。ビルマ方面軍野戦兵器廠、森第一〇三五七部隊第一大隊第二中隊に編入となった。ラングーンの兵器廠には修理部があった。兵器廠の任務は、第一線に武器・弾薬を宰領するため。の注文により、トラック、汽車、牛車などで送って行くのである。これが最大の任務であるから、行き先に

よっては汽車に弾薬を載せ、昼間は森の中に隠れ、夜間行動をしなければならない。

マンガレーの手前で空襲があり、英軍偵察機の機銃射撃で一部弾薬が爆発したことがあった。列車には一般の客も乗っているから、民間人も被害を受けることもある。そのときは残った弾薬をマンガレーの部隊に渡した。泰緬鉄道はカンチャナプリンから、モールメンからサルウィン河の下流マルタバン灣を暁部隊（船舶工兵）の指示で舟艇に乗り渡河して、ビルマへと、砲弾や手榴弾なども運ぶのである。前線では食糧は勿論だが、最も必要とするのは武器・弾薬である。「弾丸をよこせ」が第一線の声であった。従って我々兵器廠の者は、その任務の重大さを常にひしひしと感じて行動をしていた。

今申したことであるが、兵器廠の最大の任務は修理、及び武器弾薬を前線へ宰領することである。本部より命令を受けて、私はラングーンを出発し、マンガレーの手前のプローム駅で降車して弾薬を牛車に積み替え、前線へ輸送する予定であった。しかし、駅で機銃掃射

を受けたが被害は軽微であつたので無事に宰領を完了することができた。

その武器・弾薬は、内地一サイゴン飛行機でニングランドン飛行場まで空輸される。それを弾薬庫ヘトラックで納めるのである。第一線部隊から直接取りに来る所もあり、こちらから第一線まで運びもした。当時は「インパール作戦」中であつたので、アキャブまで牛車で運ぶため途中戦死された人も多くいる。

牛車の馭兵は現地人、一人で五、六台の牛車を運ぶ。空襲があると現地人は逃げるが、空襲が終われば戻って来る。現地人とは片言で、日本語も含めて話をした。給料は軍票で払うのだが、当時は価値があつたが、戦況が悪くなるにつれ下落していった。第一線までは二昼夜くらいは行程であつたが、私は将校の伝令をしていた。

兵器廠は敵機に狙われる。弾薬に誘発した場合は薬莖が飛び散るので側にはいられない。防空壕に入っても爆発と誘発の両方で、頑丈な防空壕であるのに私は左の鼓膜がやられ、復員後、医大に行って診てもらっ

たが、破れていて、今でも左耳は聴力がほとんどない。ラングーン大空襲は昭和十九年の終わりごろであつた。戦況が悪くなるにつれ空襲は激化したのだが、四、十月の雨期の時は空襲は少なかった。しかし、それ以降はますますひどくなった。

昭和十九年終りころから戦況は悪くなり、前線から撤退する前、ビルマ軍のオンリン少将が寝返つた。インパール作戦の英軍と、日本軍を挟み撃ちをし、我が軍の状況はますます悪くなってきた。昭和二十年一月ころ、我が部隊にも転進命令が出て引き揚げることとなつたが、我々はどういうことなのか分からなかつた。しかし、前線から兵隊が撤退して来るので、戦況が悪いことを知るようになった。

転進作戦命令が発令されると、兵器廠はすぐさま書類を一部焼却する。自分の身の回り品を背囊に詰め、取り急ぎトラックに器材をも積載しラングーンへ、ラングーンからインセン、ペグーまで行つた。その間、幾度も英軍機から空襲があり、特に機銃掃射が多く、シッター河の手前に停止した。空襲が激しいから夜間

になつてから渡河するのである。

シタン河畔に車両、器材は放棄する。川は延々たる濁流で渦を巻いている。夕闇と共に竹を伐採し筏を造る予定であったが、時間がないので水かさの少し減つた場所を選び、銃と背囊を頭に載せ、浮き沈みしながらようやく河岸にたどり着いた。川の岸で、力尽きた兵隊が俯せていた。服のボタンがはち切れるようにふくらんだ死体であった。川の手前で死んだり、川には死骸が流れてきていた。竹筒に切断した指を五、六本入れ、帯革につけたまま死んでいた者もいる。恐ろしく戦死した戦友たちの指を切つて遺骨にして持ち帰ろうとした兵隊であつたらう。涙なくして語れぬ情景である。その人たちの気持ちや遺族の気持ちを思うとただただ御冥福を祈るだけである。

シタン河畔は屍山血河の凄惨そのもので、この世では見られない地獄絵を見たようなものであつた。我々は、この惨状を後にし、後ろ髪を引かれる思いで、無我夢中で行軍し、幾日も幾日も、お寺などに仮泊しながらモールメンへと向かつた。

モールメン駐在中、まだ終戦を知らなかつた昭和二十年八月十五日、海軍の兄からの手紙が届いていた。兄は駆逐艦「薄雲」に乗つていて、昭和十九年七月七日、アリューシャンで戦死していたことは復員後分かつたのだが、その手紙の内容は「暑いから元気でやれ」という励ましのものではあつた。その手紙を見て、まさか兄は一年以上前に戦死していたなど考えてもみず、懐かしさがいっぱい手紙を読んだのである。

その翌日の八月十六日、英軍のピラが空から撒かれ、「日本は無条件降伏した」とあり、軍の方から終戦を知らされた。三日後に英軍によつて武装解除されて、モールメンの俘虜収容所に入れられた。戦争に負けると思わなかつたが、いろいろなことが頭に浮かび、いまだに忘れられないので次に述べる。

ラングーンに着いて最初に見たものは金色に輝くシェンダーパゴタで、太陽の光が映えてまぶしいようだった。

多くの戦友の指を切り、名前を書いて飯盒に入れて

骨にした。弾に当たるより、病氣や飢えて死んだ戦友が多かった。日本軍のやり方は、相手の物を捕って食べなければならなかった。物がなかったためだった。

病院が第一線になり、手榴弾で自爆した親切だった看護婦もいた。病人の手当もできず、放っておいて死んだ人もいた。ビルマ戦線では第一線も後方もなくなっていた。林の中で食糧も無く、アミーバ赤痢にかかり一ぺんに衰弱してしまつた体験もした。

一番かわいそうだったのは転進中、夜間、死臭がいっぱいあり、死体がもう黒くなっているのもいた。路端で倒れている兵隊から「水をくれ」というので水を飲まずと、コロツと死んでしまう。助けられず本当にかわいそうだった。(と、木村氏は涙を流しながら話をされた)

なおランゲンでの教育で三カ月いたが、昼は年がら年中暑かったが、夜になると急に温度が下がり、私はマラリア三日熱だからまだ良かったが、四日熱や熱帯熱だったら随分苦しんだと思う。帰ってからマラリア熱が一回出たが、復員の時にキニーネをもらったの

で助かった。

モールメンの英軍の俘虜収容所での使役は汽車の薪割りや木の伐採などあり、汽車に乗っての薪くべもやった。鉄道部隊などでは、戦後「戦場に架ける橋」などで話題となったように、英軍や現地人に対しての戦犯として拘束され、死刑や長期拘留された人たちもいた。昭和二十一年七月まで抑留期間中はほとんど使役だった。英軍は案外寛大だったが、泰緬鉄道関係の兵隊は相当数の者が戦犯でやられて気の毒だった。勝てば官軍、負ければ賊軍ということであり、罪なくして殺された人もいたと聞いている。

大竹港入港は昭和二十一年七月十二日であった。姫路の家に帰ってみたら、空襲で家はない。仕方がなく姫路駅に戻り、駅前の果実店の土間に泊めてもらった。翌日、戦友と別れ焼跡へ行き、近所の人から家族の居場所を教えられた。家族は母の実家、但馬へ行っていて、ようやく二年十カ月ぶりで再会することができた。

私は、先に申した海軍の兄の手紙の話をしたが、ま

さか、二年前アリューションで戦死したとは思って
いなかった。戦友はバラバラに帰っているので戦友会
もなく戦友とも会えない。

パゴダ（仏塔） 国ビルマにおいて戦場となり玉砕に
つぐ玉砕で死闘をつづけ、夥しい数の兵士の英霊に安
らかにと合掌します。

ビルマは四月中旬から十月中旬まで、ちょうど雨期
であります。常夏の国ですが、夜中になると雨が降っ
ているのかと思われるほど露が下り温度が下がります。
兵舎の屋根は椰子の葉を重ね合わせて造っているので
露の降る音が高い。

農業国であるビルマの諸民族の多くは仏教信者で、
性格は朗らかでビルマ人は転進中、乞食同然の兵士た
ちを迎えてくれ、彼らには幾度か命拾いさせてもらい
ました。

南ビルマ従軍回顧

宮城県 尾形 喜七

私は昭和十九年六月十五日、仙台市東部第二十二部
隊（第二師団歩兵第四連隊留守部隊）へ入隊しました。
臨時召集です。当時、大東亜戦争も戦局が劣勢で緊迫
し、日本内地にも民間の対空監視哨が設置され、私は
視力が左右とも二・〇とよく見えたので、監視哨の副
哨長であった関係上、召集延期であったように思われ
ます。

応召時の私の家族は、

父	健在	農業
母	〃	〃
本人	〃	二十九歳
妻	〃	二十七歳
子一人	〃	一歳
兄	〃	〃